

Re:World

ファンタジーパロイナスレ

もう随分と、色のない世界にいた。

僕の居場所は閉ざされていて、他には誰もいなかった。

漆黒の闇の中、食べ物も水もなく鎖に繋がれ蹲る。寒くはないが、自分の身体を抱いていないと眠れない。何も見えないのだ。触ることでは、自身の形を確かめられない。

腕があり、脚があり、腹も胸も頭もある。そして思う。どうしようもなく退屈だ。僕に終わりは訪れるのだろうか、と。その度、耳がひくひくと動き、毛に覆われた尾の先が床を擦った。普通の生命なら、きつとすぐに終わっていたろう。そうならないのは、僕が人ではないからだ。人の身体に、獣の耳と尾があつて、八重歯が人のものとは違う。

半分は人。もう半分は人ではない。獣の部分は巨大な白いオオカミ。それはこの国の神獣だった。

これは呪いと人は言い、これはご加護と父は言った。僕は、どちらもそう変わらないと思う。光の中でも闇の中でも、一人になるのは同じだからだ。

こんな生命に、生まれた意味などあるのだろうか。

「……………スレイン」

舌を転がすと、掠れた声が名を綴る。時々こうして、自分の声と自分の名前を確かめる。

「……………スレイン」

この名前を呼んでくれたのは、お父さん。多分お母さんも呼んでくれたのだろうけど、僕の記憶にはない。人々は、僕を「フェンリル」と、「ヴァナルガン」と、「フローズヴィトニル」と呼んだ。言葉の意味は、怯えた幾百の瞳が語っていた。

「僕は、……………スレイン」

僕の名前を呼んでくれた。お父さんと、顔も知らないお母さんと、そしてもう一人。

『スレイン』

少女の金の髪が青空を背に風に靡く。白い衣が翻り、たおやかな指が裾を掴む。

人間の女の子。僕を怖がらず、僕を拒まず、僕から逃げず、僕の名前を呼んでくれた。それはもう、気が遠くなる年月の彼方だ。

彼女は、もうこの世界にはいないのだ。

人の寿命の数回分。僕は死ねずに、こんな場所で身を縮こめて待っている。

待っている。何を？

僕に手を差し伸べる、カナリアのような美しい少女を？

彼女は、もういないのに。

「アセイラム……………」

少女の名前を呟いた。それと同時に音がして、風が起こる。瞑った瞼の血潮が見える。

「それが、君の名前？」

そして、光の中から声がした。

——そして。

「伊奈帆」

「何？」

斜め前がかがみ込む旅の連れ合いが振り向いた。彼の前には、円筒、球、円錐等の様々な形状をしたガラス器具が神経質に仕事をしている。操作しているのは白髪の老人。迷いのない手つきで、複雑な器具を流れるように操作している。自然界では決して見ることもないような、鮮やかな色の液体が装置を行き来する様子を、伊奈帆はかれこれ小一時間ほど眺めていた。

布地の厚いカーテンは締め切られ、布の合わせ目から光が鋭い線となって差し込んでいる。木製の天井から吊り下がるランプには火が灯り、棚の小瓶やケースの標本、色分けされた鉱石類、プランターの曲線系の植物などを飴色に照らし出す。薄暗い室内には、他に

も込み入った器具が所狭しと、しかし整然と配置されており、店主の性格を思わせる。

路地の奥まった場所にある、小さな薬屋である。頼んだものが仕上がるまでに、まだ時間がかかりそうだ。

「落ち着かない」

スレインは目だけで周囲を見回し言った。自分には、そそかしいというか、おつちよこちよいというか、伊奈帆の言葉を借りるなら「ほんこつ」などところがあると自覚している。迂闊に動く、何かを壊してしまいそうだ。

「だよね。先に戻ってる？」

それらのことを察したらしく、伊奈帆が軽く頷いた。

「そうする」

宿は既にリザーブしている。スレインは背中中のフードを手繰り寄せ、鼻の先まで引っ張った。

「この荷物、頼んでいい？」

「ああ」

買い出しの荷物を持ち上げる。食料品が多い。これは今から食べるのではなく、それぞれに処理をして保存食にするためのものだ。

「僕が帰ったら、二人でなんか美味しいものを食べに出よう」

食べたいものを考えといて、と言われ、スレインはうん、と小さく答える。食べたいものを決めるのは苦手だ。それを知っているはずなのに、伊奈帆はいつも言う。食べたいものがある？君が食べたいものにしよう、って。

「じゃあ、先に行ってる」

「うん。のんびりしてて」

のんびり、か。退屈は好きじゃないが、確かに疲れはあるようだ。僕は荷物を両手に抱えて、薬屋を後にした。

……つけられている。

薬屋を出て三つ目の曲がり角から。スレインは、またか、と小さくため息をつく。目立たないように気をつけているのに、どうしてこうも絡まれるのだらう。

伊奈帆は「もう少し自覚して」と言うが、何をどう自覚するのかわからない。だから聞くのに、いつもその先ははぐらかされてわからずじまいだ。

「おい、お前」

背後の声を無視するが、仲間がいたらしい。前に二人、後ろに一人の挟み撃ちになり立ち止まる。

「お前だよ、フード野郎」

前の男が逆光の中でそう言った。不潔そうな人差し指がこちらを指す。

「俺たち、腹ペコなんだよ」

「それ、置いていきな」

路地裏の壁を背に見上げた相手は体格の良い男が三人。チンピラ風で、身のこなしは隙だらけ。明らかに素人だ。見えないように腰から下げた武器に意識をちらりと向ける。「爪」を使えば一瞬で済むが命の保証はできかねる。素手も数秒で戦闘不能にするなど造作もないが、どうしたものか。悲鳴で野次馬が集まれば面倒だ。できるだけ穏便に済ませたい。目立つと厄介な身の上なのだ。

「ほら、痛い目に遭いたいのか？」

伸びてきた腕を避ける。一度。二度。三度。顔が近い。男の顔が怪訝の色を浮かべる。

「しゃべらねえな。細っこいし、もしかして女じゃねえか？」

その一言に、連中の一人が口笛を吹く。

「確かに、そんな感じすんな」

「おい。そのフード取ってみろよ」

じりじりと、にじり寄るのは好色そうなにやけ顔だ。変な勘違いまでされてしまった。

「よく見ると、いい顔してるぜ」

至近距離で下から顔を覗かれる。顔を逸らす顎をつかまれ引き寄せられる。ヒュウ、と再び軽薄な口笛が聞こえた。

「金髪に碧い眼。……おい、こりゃ上玉だぜ」

首を振って掴む手を振りほどく。何考えてるんだ、こいつら。

「やめてください」

低い声を出すと、男たちの動きが止まった。勘違いのようにやく気づいたか。三人は互いに顔を見合わせる。

「声低くね？」

「男か？」

よし、今の隙に。

「いや、俺タイプ」

背後の一人の声がでかい。にやけ顔の頬がぽつと赤い。嫌な予感。

「俺、……こういう、何？ ハスキーボイス、タイプだわあ。……色っぽいじゃん」

馬鹿なのか。こいつ。両隣のやつらもうんうと頷くな。違うって。

「いや、僕は……」

「セクシーボイスの僕っ娘かあ……」

「ギャップがいいよな」

「僕の話、聞いてください」

「うわ、腰ほっせえ……」

「そんな野暮ったい服じゃ勿体無いぜ」

「いや、だから……」

「なあ、優しくするからさ。俺らとちょっと遊んでこーよ」

「人の話を……」

「ちよっとだけ。な、ほら、こっち来いって」

こうなれば、いよいよ実力行使しかないか、と荷物を目に置こうとした時。

光が揺れた。チラチラと、顔に落ちる七色のプリズム。

「あ……」

男らの上空に揺蕩い重さを増しているのは、透明な球。その球を通して、太陽の光は生き物のように揺れている。

その球体は水だ。

こいつらは、気づいてない。

もう、かなりの大きさだ。人が一人乗に入れるくらい。

それがクツ、と上昇する。

「あ。さ。少し、頭を冷やした方がいいよ」

感情を排した少年の声。同時に水球がパチンと割れ、すぐ目の前に滝ができる。

バsshヤーン！

「うわあっ!？」

「み、み、みず??」

「げほげほっ! ごほ、がほっ」

僕に絡んできたチンピラたちは、突然の頭上からの洪水に尻餅をついて咳き込んでいる。

「スレイン」

彼らの向こうに伊奈帆がいた。左手に菓屋の包みを、右手に槍を持っている。

ルーン文字を刻まれた、不思議な光沢を放つ長槍。

「ごめん。待った? 行こう」

伊奈帆の言葉に頷き、巨大な水溜りを避け駆け寄る。あんなに近くにいたのに、僕は靴に飛沫が飛んだ程度で服は全然濡れていない。相変わらず、魔法制御のスキルが高い。

「ま、まで……!」

このまま黙ってればいいのに。伊奈帆がくると振り返り、槍の柄を地面に突き刺す。

「濡れたままじゃ寒い? 乾かしてあげようか」

武器に刻まれた文字が魔力を宿し詠唱として青白く発光する。刃先に魔力が集中し、周囲の温度がぐんと上がる。

「乾かすだけで済めばいいけど」

火花とともに炎が練られる。ヒイツ、と悲鳴を上げて後退りをするごろつき達を見下ろす伊奈帆の横顔を見て、スレインはボンと肩に手を置いた。

「そのくらいにしとけ」

目が合う。瞬き、伊奈帆は槍先を下げた。

「君がいいなら」

「いい。十分だ」

顎をしゃくると、男らは捨て台詞もなく逃げ去った。ああいう連中は、逃げ足だけは速いのだ。

「まだ、怒ってるか?」

スレインが聞くと、伊奈帆はふう、と大きく息を吐く。

「最初から、怒ってない。君には」

でも、行く先々で、どうしてそう絡まれるわけ? と続いた言葉に顔を顰める。心配してくれているのはわかるが、いつも一言多いのだ。

伊奈帆は武器を納めた。踵を返し歩き出す彼の隣に並ぶ。伊奈帆が横目でこちらを見た。

「何食べたいか決まった?」

そういえば、決めておいてと言われていた。空を見上げ、歩きながら考える。炎の香りが鼻の奥に残っていたので。

「肉かな」

と呟くと、伊奈帆が小さく笑った。

「僕も。あつちに美味しそうながあつた」

ぐるぐる回して焼いててね、それを削いで食べるんだ。聞いていると、その途端、くう、と腹が小さく鳴り、空腹を自覚した。

「包んでもらって、宿で食べよう」

「うん」

伊奈帆のぶつきらぼうな優しさに微笑み、二人は並んで路地を抜けた。往来の明るい喧騒と色とりどりの野菜や果実、肉が香ばしく焼ける匂いが広がった。

——暗闇を照らす声。

「それが、君の名前？」

数百年ぶりの太陽の光。曇り空だがあまりに眩しく、とても目を開けていられない。頬が感じる風の温度はひやりと冷たい。肌が粟立ち、背筋が震える。

唐突に、外の世界への恐怖を感じた。

「……違う」

強張る喉をこじ開け言う。ぼやけた視界に、影が見える。輪郭が次第にはっきりとして、履き古したブーツの爪先が見えた。

「君の名前は？」

逆光を受け立つのは、ローブを羽織った小柄な青年。いや、少年と言っている。警戒心が薄らぐ。しかし彼の背にある武器の刃が鋭く光を反射して、意識的に目を吊り上げる。

「知らずに、ここに来たのか？」

そんな馬鹿な話はない。人里離れた険しい山の奥地にある氷の洞窟。周囲には幾重にも封印のまじないがかけられている。決して、迷い込むような場所ではないのだ。

「災厄の王フェンリル、って」

少年は答える。声も表情も冷静沈着そのもので、ふてぶてしいとも思える態度だ。

「でもそれ、君の名前じゃないでしょ？」

思いもよらぬ言葉に、思わずはっと顔を上げる。幼さの残る面差しに、機械仕掛けの左の眼帯。理性的な隻眼がこちらを見つめていた。

「僕は伊奈帆。界塚伊奈帆。君は？」

背中の武器は柄が長い。槍だ。とてつもない霊力を秘めた槍。意思すら宿る聖槍もしくは魔槍の類い。

只者ではない、と思うと同時に、だから何だ、とも思う。もしもその槍で僕を殺しにきたのなら、願ったりだ。

「カイツカイナホ。僕に、何の用だ？」

望む答えが返らずに、イナホの瞳が大きく瞬く。表情の変化は微細だが、目が語る。夕焼けにも似た赤色が、彼の心を映し出す。

そこに、敵意も悪意も蔑みもない。だからこう聞く。

「何が目的だ？ 滅ぼしたいのは、村か？ 国か？ それとも世界か？」

身を起こす。手足の鎖が石床と擦れ耳障りな音を立てる。

「僕の力を、何に使う？」

腕を伸ばし、拳を握る。力を鎖で封じられ、今は人に等しい手。獣の爪は失われ、獣の牙は削られた。それでも決して死ねはしない。そんな、この上なく無様な姿で問いかける。

睨みつけた顔は、銜いなく僕を見返し静かに首を左右に振った。

「別に、何も」

「……何も、だと？」

低い声で問い返す。イナホは洞の中に踏み込んだ。そのままゆっくり僕に近づく。

「興味本位でここに来た」

しゃがみ込んで、顔が見えた。僕の見た目も大人とは言えないけれど、それでもそれよりいくらか若い。

頬に丸みがあり、十五、六歳くらいに見える。

まだ、ほんの子どもじゃないか。

「本当にいたんだね。すごい」

声が少し弾んでいる。暗い洞窟の中で楽しげな目がやけに眩しく見える。

「……それで？」

「それだけ」

「それだけ？」

苛立ちが声に出る。イナホは背を丸め、僕に顔を近づける。

「君を利用するつもりは毛頭ない。そんな深刻な事情は僕にはないからね」

フェンリルという名を知っているなら、厄災について知らぬわけでもあるまいに。好奇心という理由で、人間なら命がけの道のりを。僕に殺されるかもしれないのに。

こいつ、一体なんなんだ？

「それで、君の名前は？」

イナホが再び問いかける。軽い調子の声音に、答えてやってもいいか、という気分になった。

風が吹き、目を閉じる。靡くカナリア色の髪が見えた気がした。

『それで、あなたのお名前は？』

彼女も、同じように僕の名前を聞いたのだ。生まれた時の人の名を。

「……スレイン」

イナホは満足気に頷く。笑顔ではないが、嬉しそうな顔に見えた。

「そう。ねえ、スレイン」

聞き慣れぬ名にどきりとする。こんな風に、再びこの名を呼ばれる日が来るなんて。胸に手を当て、早い鼓動を手のひらに感じる。

まだ、動いていたんだ。

生きていた。僕は。死んでいないのではなく、確かに生きていたのだと。それを思い出した。

なんだろう。この気持ちは。少し怖い。でも多分、とても嬉しい。

「スレイン」

イナホが名を呼ぶ。見ると、彼は顎を引いて僕を見た。

「どうして、空が青いか知っている？」

「はあ？」

「どうして、雲が白いのかも」

何の話をしているのだろう。空が青いか？雲が白いのか？そんなの、理由を考えたことなどない。

「……元々の色だろう？」

伊奈帆はきっぱり左右に首を振る。

「レイリー散乱だよ」

「レイリーサンラン？」

うん、とイナホは立ち上がる。半身を向けて、洞窟の入り口を指差す。

「ねえ。いい天気だよ」

ぽっかり空いた穴からは、光が見えた。小さな空も。

イナホはスタスタと入り口へ向かい、その背の武器の全容が見えた。古の呪文が刻まれた槍は見覚えがある。

グングニル。軍神オーディンの魔槍。

穴から出たイナホは太陽光に包まれる。背中に右手を回し、瞬時に槍が両手に収まる。槍は既に、彼を主人と定めたのだ。

「大空を、見たくはない？」

僕が返事をする前に、そいつは槍を空へと掲げた。空気が震え、尻尾がピンと上を向く。槍は黄金に輝き、次の瞬間岩は砕け砂となる。封印の地、呪符も鎖も窟も檻も全てが崩れ、形を失い消えてゆく。巻き起こる砂嵐に両目を瞑り、口と鼻を腕で覆う。

やがて嵐がおさまリ、臉の向こうが白くなる。

「スレイン。目を開けて」

イナホの声。恐る恐る両の臉をこじ開ける。最初に見えたのは、薄ぼんやりとした草原と木々。

顔を上げる。頬を撫でる風の先は一面の青。

「空、だ……」

二度と見ることはないはずだった空。イナホの言葉が蘇る。

『どうして、空が青いか知っている？』

聞いてみたいと思った。空が青い理由を。

— *think blue, count two* —

あとがき

読んでいただきありがとうございます。

「橙とコウモリ」第2回開催おめでとうございます。企画の「ぬりえ大会」のお題が「ファンタジー」という大好きな世界観で、ウキウキとぬりえ用の線画をカリカリしていると妄想がふくらんでしまい、いつの間にか本ができていました。一昔前の長編ファンタジー連載第一話のノリを目指したのはいいものの、書いてる途中で「これはベタすぎか？くさいか？やりすぎ？」と正気に戻りかけましたが「二次創作は恥ずかしくてなんぼ」と思いアクセルを全開で踏み抜きました。モブがかわいくなりすぎちゃったかなあ、と思いつつ、こんな古き良き様式美の香る暢気な話もいいよね、と。書いてる途中、最高に楽しかったです。ファンタジーいいなあ。

お付き合いいただきありがとうございました。またお会いできますように。

鳴海

イメージソング「閃光」Alexandros

Re:World

発行 Scramble/鳴海
発行日 2023.2.19/橙とコウモリ 2
印刷所 (株)しまや出版様

Mail jjncg720@yahoo.co.jp
Twitter @narumiblue
Pixiv ID 955950

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはお控えください。